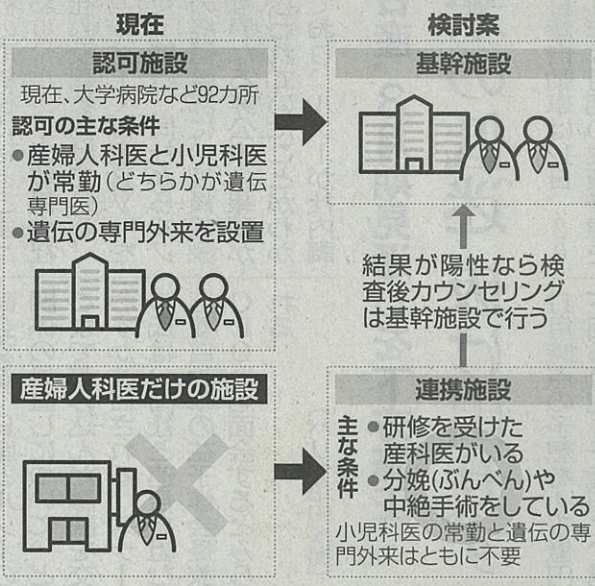


新型出生前診断(NIPT)をめぐる制度



出生前診断緩和 懸念の声も

研修を受けた産科医 検査が可能に

適切なカウンセリング課題

胎児にダウン症などがあるかを調べる「新型出生前診断(NIPT)」について、日本産科婦人科学会(日産婦)が、検査施設の条件を緩和、研修を受けた産科医がいる施設ならできることを目指している。12日に開いた倫理委員会でも検討、早ければ春にも決める。だが、安易な拡大につながるかわりに、専門家からは問題点を指摘する声も相次いでいる。

NIPTは原則35歳以上の妊婦が受けられ、染色体の本数が通常と異なることで生じる、ダウン症など3つの可能性があるかが高い精度で分かる。陽性が出ても羊水検査などをして、診断を確定する必要がある。大学病院など92カ所の認可施設があり、検査前後に必ずカウンセリングをする。カウンセリングを重視するのは、NIPTが採血だけで簡単に受けられる一方、結果次第で、産むかどうか重い生命の選択を迫られるからだ。

一方、手軽に検査を受けられる認可外の施設での検査が増えている現実がある。年齢制限がないなど、うとう施設が目立つが、結果の説明が不十分で妊婦が戸惑うケースもある。日産婦は、研修を受けた産科医が検査できるようにする案を検討している。認可外で検査を受ける妊婦も減らしたい懸念がある。

先月の会合で出た案だと、産科医だけのところは「連携施設」、産科医と小児科医が勤務する従来の認可施設は「基幹施設」と位置づける。連携施設で受けた検査で陽性の場合、基幹施設でカウンセリングを受ける。

検査を受けやすくなれば検査を受ける人が増えることが予想される。染色体の数が通常とは異なる子だとわかったうえで、出産を決める夫婦もいる。「ダウン症をはじめとして、子どもたちが『なぜ生まれてきたんだ』と差別的な扱いを受けることなく、十分なサポートを受けられるようにしなければならぬ」と懸念する。

認可施設のNIPTの流れ

- 1 カウンセリング**
●ダウン症などの症状
●結果のとらえ方などを説明
- 2 妊婦の血液を採取**
(妊娠10~22週に可能)
- 3 結果説明とカウンセリング**
※検査前と同様

命に優劣広まる恐れ

検査を受けやすくなれば検査を受ける人が増えることが予想される。染色体の数が通常とは異なる子だとわかったうえで、出産を決める夫婦もいる。「ダウン症をはじめとして、子どもたちが『なぜ生まれてきたんだ』と差別的な扱いを受けることなく、十分なサポートを受けられるようにしなければならぬ」と懸念する。

検査を受けやすくなれば検査を受ける人が増えることが予想される。染色体の数が通常とは異なる子だとわかったうえで、出産を決める夫婦もいる。「ダウン症をはじめとして、子どもたちが『なぜ生まれてきたんだ』と差別的な扱いを受けることなく、十分なサポートを受けられるようにしなければならぬ」と懸念する。

検査を受けやすくなれば検査を受ける人が増えることが予想される。染色体の数が通常とは異なる子だとわかったうえで、出産を決める夫婦もいる。「ダウン症をはじめとして、子どもたちが『なぜ生まれてきたんだ』と差別的な扱いを受けることなく、十分なサポートを受けられるようにしなければならぬ」と懸念する。

「医療機関はNIPT1件で数万円の収入があり、検査を受ける人が多いほど収入が増える。勧誘のように入れば、もはやカウンセリングとは呼べない」(福地慶太郎、大岩ゆり)

「医療機関はNIPT1件で数万円の収入があり、検査を受ける人が多いほど収入が増える。勧誘のように入れば、もはやカウンセリングとは呼べない」(福地慶太郎、大岩ゆり)

2019.2.13 朝日(m)7